

響は維新後も続いたと見え、明治3～5年にかけて旧藩領11郡に対し、医学教授のための郷校を設置したという一件は特に注目される。このような話はあまり耳にしたことがない。場所は全て寺院があてられ、試業もあったという。郷村医の所管形態、引痘業務等との関連を含め、維新期の村落医療や在郷医養成システムの解明に一石を投ずる事例となることは間違いない。

藩政改革は治郷の腹心・朝日丹波を中心に進められ、人参、木蠟、鉄などの特産品を専売化するなどで、寛政期にかなり改善し、8万両の余剰金を生ずるに至った。教育の発展は財政的安定が確保されてこそ実現される。その結果、さらなる改革の推進力となる有能果敢な人材が育ち、19世紀の初めに向け、松江藩教育は最も充実した時期を迎えたと著者は結論する。実はこの点を見逃してはならず、松江藩学のピークが化政期にあり、天保以後の体制変革期にあったと記さぬ点は極めて重要であろう。倒幕派の西南雄藩が一樣に幕末に飛躍する点との大きな相違は、今後じっくりと考えるべき問題であるように思う。

本書は「松江市ふるさと文庫」シリーズの第11冊として刊行された。よって啓蒙の意図を有する入門書、概説書に分類するのが適当であり、決して専門性の高い学術書ではない。だが内容的にはそれに見劣りせぬ水準が保たれている。叙述は詳

細で実証性に富む。また丁寧な語り口調はかえって説得力を生み、加えて人名・地名の多くにルビをふる点も他県人にとっては重宝この上ない。かつ図版が豊富に挿入され、巻末の「参考文献」に島根県立図書館が所蔵する雲藩関係の貴重文書を列記する点にも、著者の学問に対する真摯な姿勢が反映する。松江藩における儒学・医学の史的展開は本書をえて、初めて全体の俯瞰が容易となったのであり、その功績は大きい。

著者は副題に「財政再建と人材育成は藩校から始まった」と添え、我が国の経済・教育再生への手がかりを郷土先賢の知恵と行動に求めようとしている。評者は出雲の小学校を舞台とした『白い船』という映画が好きである。あれを見たのと同じ感銘を本書読了時に受けた。著者の人材育成にかける教育者としての情熱と使命感は行間に横溢し、その気概に打たれたのである。《地方医史の時代》が訪れる気配が濃厚ないま、著者の力によって雲石医史がさらに開拓されることを期待する。

(亀田 一邦)

[松江市ふるさと文庫, 〒690-0826 松江市学園南1丁目17番24号 松江市教育委員会文化財課文化財係, TEL. 0852(55)5294, 2010年6月, A5判, 104頁, 800円+税]

吉良枝郎 著

## 『明治期におけるドイツ医学の受容と普及

——東京大学医学部外史——』

本書の著者である吉良枝郎氏は、順天堂大学と自治医科大学の名誉教授で呼吸器内科を専門とされている。10年ほど前より江戸時代から明治期にかけての医学の歴史を研究して、著書として発表しておられる。前作は『日本の西洋医学の生い立ち——南蛮人渡来から明治維新まで——』、『幕末から廃藩置県までの西洋医学』であり、本書はそれに続く第3作目である。

本書で扱われる時代は、明治4年のミュルレルとホフマンの来日から明治20年代のあたりまでである。この時代に起こった医学教育および医師資格付与制度の変更や、医学校の興廃については、『学制百年史』、『医制百年史』、『東京大学医学部百年史』といった公式な通史や、医学・医療の歴史に関する著作の中でよく扱われている。この著作では、これまでの通史や著作を踏まえた上

で、さらに『文部省年報』、『東京大学医学部年報』、『中外医事新報』といった当時の資料を駆使して、歴史の舞台となった医学校や登場する人物にさらに深く切り込んでいる。

本書で取り上げられているさまざまな話題の中でいくつかを取り上げて紹介すると、まずミュルレルとホフマンがもたらした医学教育の変革と、行った授業の内容が詳しく取り上げられている。ミュルレルが東京医学校（後の東京大学医学部）で初めて目にしたのは、300名程の学生が大部屋にたむろし、10～16人のグループで机を囲み、各自がそれぞれに医学書を広げて声を出して読んでおり、時折教師に質問するといった私塾のような状況であり、これが江戸時代から明治初期まで日本の医学校で行われていた一般的な学習方法であった。日本人の教師も学生もこの学習方法を変えようとは思っておらず、分からない事柄に即座に答えを与えたり、特別な治療法上の秘法を伝えたり、といった便利な情報源としての役割をドイツ人教師に期待していた。しかしミュルレルは、学生たちの知識レベルや理解能力を十分に把握した上で、系統的な一斉講義による学習方法に変更するために教育システムの大胆な変革と学生の選抜を、文部卿大木喬任の支援を得て実施する。この変革と選抜を経て東京医学校に残った学生たちが、どのように成長し、そのように活躍していくか、残れなかった学生たちはどのような人たちであったか、著者は、この学校で学んだあらゆる人たちに温かい眼差しを注いでいる。

明治8年に東京医学校に通学生教場（後に別課）が設置され、日本語による簡便な医学教育が開始される。明治10年代には、全国で各地に公立の医学校が通学生教場をモデルとして設立される。明治15年の医学校通則により医学校は甲種と乙種に分けられ、甲種は学士3名以上の教員を必要として卒業生に無試験で免許を与えられ、乙種は学士1名以上の教員で卒業生は試験に合格して免許を与えられる、と定められた。東京大学医学部の卒業生のうち3分の2程度が、全国の医学校で教員として働くようになった。これら卒業生たちは各地の医学校でしばしば校長となり、医学教育システムを改革する一方で、年長の経験に富む部下との間で軋轢を生む場合もあったことを、吉良氏はさまざまな実例を挙げながら冷静で穏やかな筆致で語っている。

本書で語られている明治期の医学教育の実相には、著者が蒐集した膨大な資料による裏付けがあるが、そこに登場する人物については、著者は自らの医師かつ大学教員としての豊富な経験と豊かな想像力をもとに、彼らが体験したであろうことを慈しみ深く語っている。歴史は単に事実の羅列ではない。人間の営みについての心を豊かにする物語であるということを、本書は改めて教えてくれる。

（坂井 建雄）

[築地書館、〒104-0045 東京都中央区築地7-4-201、TEL. 03 (3542) 3731、2010年4月、A5判、212頁、2,400円+税]

## W・ミヒェル、鳥井裕美子、川寫真人 共編 『九州の蘭学——越境と交流——』

この労作は2009年7月1日の刊行である（思文閣出版）。主著者のヴォルフガング・ミヒェル氏は日本医史学会理事としてドイツ人ながら日本に定住され九州大学大学院教授として学生の教育と日本古代史とくに中世時代の日本と各国の交流史の研究に著名な学者であり、平成21年九州大

学教授を定年退官され、引き続き研究講義を九州大学医学部大学院名誉教授として継続して居られるし、共著の川寫真人先生はミヒェル教授と同じ日本医史学会の理事であり、大分県中津市で整形外科病院を盛業されている多忙な臨床活動の傍ら、郷里大分の医史学研究を続けられ、医史学会